

【発達障がいは発達する～食事編②～】

「あっくんはたべられない一食の困難と感覚過敏一」という絵本があります。絵本の巻末には、東京学芸大学名誉教授高橋智氏の感覚障がいについてのわかりやすい解説がついていて、食の困難だけではなく皮膚感覚、聴覚、視覚などの感覚障がいについても理解を進めることができるような構成になっています。

絵本は、「あっくん」という自閉スペクトラム症の当事者の方がダイナミックな絵とリズムカルな文章で私たちに味覚障がい、嚥下障がいのことを教えてくれています。また、その支援についても大きな示唆を与えてくれています。「あっくん」はその後、東京造形大学美術学科（絵画専攻）へ進学しているということです。絵本の絵が本格的だったことを今さらながら納得している私です。

さて、絵本の内容は、もちろんたくさん食べられないものがあるというところから始まって、だんだん食べることができるようになっていくというものなのですが、食べられないという点については、感覚障がいの勉強を重ねている皆さんの周知のことですので、ここでは、それがなぜ食べることができるようになったのか？という点に絞って話を進めていきたいと思います。

「あっくん」のお弁当は、いつも食べられる大好きなものだけが入っているお弁当だったのですが、高校生だったある日、お弁当をバスの中に忘れてしまうということが起こりました。そこでクラスメートみんなが心配してくれて、お弁当の中身を分けてくれるのですが、これが嫌いなものばかりなわけです。「あっくん」は、大いに困り果てます。ところが大好きな女の子が分けてくれたものもその中にあるのです。見るとその女の子はとてもおいしそうにそのおかずを食べています。そこで「あっくん」は勇気を出して…、といういかにも甘酸っぱい青春らしいエピソードを挟みながら物語は進みます。

この物語を理解するうえで、一つアカデミックな研究を紹介しておきます。

摂食障がいの方々の家庭での食事風景を研究したものです。その食事風景の特

徴は一言でいえば、家族団欒が無いことが多いということです。みんなが食卓を囲んでいても、お父さまが厳格な人で、一言も食事の時には口をきいてはいけないという躰のもと、みんなが黙々と食事をとっていたり、みんなが揃っていてもそれぞれがテレビを見たり、携帯をいじったりして、まるで個食と同じだということです。もちろん、家族という単位で暮らしているのもかわからず、揃って食卓を囲むという習慣がないという本当の個食の家庭も多いのだそうです。

つまり、摂食障がいの発病とその食事風景、さらに家族構成者間の情緒的關係は大きな影響を与え合っていることになります。

食事は確かに身体の栄養を取り入れる場所と時間なのですが、心の栄養を取り入れる場所と時間であることがお分かりいただけるのではないかと思います。

さて、ここで「あっくん」の話に戻してみましょう。好きな子のくれたおかずだったら食べることができる、ということと、摂食障がいの方々の家族団欒の無さとは、感覚障がいと言えども、ポジティブな対人関係を背景に次第に克服することができるのだという可能性を示唆してはいないでしょうか？

「家族団欒の食事」という支援方法があります。一週間に一度だけ、支援職員二人といかにも家族のようにして食事をするという支援方法なのですが、それはアルコール依存症の父親がいる家庭で育った彼に「平穏な食事風景」を提供することで、少しでも穏やかな暮らしをと願った末の支援方法だったのですが、それが思わぬ結果を生んだのです。ジャガイモしか（ジャガバタ/ポテトサラダ etc.）食べることができなかった彼が、次第と一緒に食べている職員の給食メニューを指さし、欲しいと伝えることが多くなり、最後には給食を食べることができるようになったのです。つまり超偏食が治った（？）のです。そして、その要因は、間違いなくポジティブな情緒的關係における食事なのです。

「発達障がいは適切な支援環境のもとで発達する」という命題をこのエピソードは証明しています。